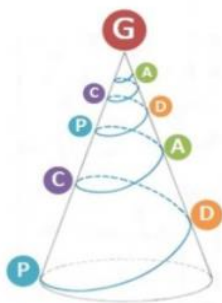


1 学期学校訪問から学んだこと②

【観点2】教育課程の改善につながる検証・改善プロセスの質の向上

検証・改善プロセスについては、プラン冊子p. 41のサイクル図を参考としながら、校内の検証改善の結果を次年度の教育課程や次年度の「学校評価の4点セット案」に反映させること（カリキュラム・マネジメント）。また、学校運営協議会の開催時期や議題を校内の検証・改善と連動させること。

『芯の通った学校組織』推進プラン第3ステージ中間年に向けた取組方針について（依頼）令和3年3月5日付 教委教改第1442



訪問させていただいた学校では、客観的な資料等を活用し昨年度の状況を踏まえながら、学校評価の4点セットが策定されていました。また、検証チーム（縦）と学年部（横）との連動や、チーム会議→運営委員会→職員会議を1か月サイクルで回す等、自校の規模や状況に応じた検証・改善システムを構築しており、毎月焦点化された取り組みへ繋がる好循環となっています。

さらに、昨年度の学校訪問における協議内容について校内で研修を行ったり、SWOT分析で学校の強みを活かした戦略を立てたりすることを通して、教育課程へ反映させている学校もありました。ある学校では、組織を動かしていくうちに非効率なことが生じたため、学期途中でも大幅に組織改編を行うことで、今ではスムーズな学校経営ができているという報告もありました。

「無言清掃」の目的は？ 子どもに付けたい力は？

- A 先生 「掃除だけに集中することです。忍耐力をつけさせます」
- B 先生 「掃除を素早く行うことです。掃除のやり方を知ることです（知識・技能）」
- C 先生 「この汚れを取ると自ら課題をみつけるためです。問題発見・解決能力です」
- D 先生 「無言で掃除をすると心が落ち着きます。メタ認知や人間性を育てます。」
- E 先生 「数年前に掃除をしない子が多かったから始めたそうです。とにかく無言でやらせま



どの先生の考えもわかります。無言清掃は手段であって目的は子どもに「どのような力（資質・能力）」をつけるのかです。「何のために」「どんな力を」について合意形成を図らないと、教師の指導に差が生じたり、子どもも思考停止となったりと達成指標はクリアしても、重点目標（資質・能力）に近付かない場合もあります。

「PDCA」の落とし穴 Checkの際に気をつけること（PDDDDにならないように）

① 「成果が十分出していない」時の落とし穴

他の改善策（Action）はそう簡単に見つかるものではありませんね。そのため、「もっと徹底的にやろう！」それでも改善しないときは、「やる回数を増やしてみよう」と、取組内容は変更せず指標の数値を上げるいわゆる「ガンバリズム」となると、教師の多忙化に拍車がかかってしまいます。

② 「目標を達成した」時の落とし穴

達成指標「〇〇と回答した子どもの割合80%」の目標を達成したので「もっと目標値を上げよう」と安易に数値を上げる場合があります。しかし、「60点を80点にする」と、「80点を100点にする」は同じ20点アップですが、後者は前者の5倍以上の労力がかかると言われています。（パレートの法則）

このように、取組指標や達成指標のみに目がいくと、手段が目的化し、教師や子どもの負担が増える割には成果が上がらないことに陥りがちです。そのためには、Checkをする際に、取組指標や達成指標が、重点目標（資質・能力の3本柱）に近付いているのかという視点で検証・改善することです。そして、場合によってはDoよりも、Plan自体を再度吟味することも大切です。（注：Pを増やさないように）

資質・能力 (3本柱)	学校評価の4点セットの各項目		
	重点目標	達成指標	重点的取組
生きて働く 知識・技能 の習得	目標	ゴールイメージ (子どもの姿)	手段
多様な状況・事象に対応できる 思考力・判断力・ 表現力等 の育成	目標	ゴールイメージ (子どもの姿)	手段
教育活動の中で自ら学び 学びに向かう力・ 人間性 の涵養	目標	ゴールイメージ (子どもの姿)	手段

短期PDCAで、「できた！」を実感させよう！

「取組指標」の中には、例えば期間を2週間と集中して行うことで、子どもに「〇〇ができるようになった」「このような力がついた」と成長を実感させます。さらに、翌月は他の事に取り組み「これもできた」と成功体験を繰り返すことで重点目標に近づく方法もあります。大分市立荏隈小では、3部会を中心に取り組んでいるのですが、年度当初に各月の「最重点目標」を一つ定めています。毎月全校を上げて組織的に取り組むことで成果が見え、子ども達だけでなく教師も自信を持つことができ、人材育成にも繋げています。

長期的に取り組む場合は「どのような力（資質・能力）を付けるか」をより明確にすることで、マンネリ化を防ぎます。上記の無言清掃の例では、4月「掃除の仕方を知る（知識・技能）」、5月「無言でも協力できる（非言語コミュニケーション力）」、6月「自ら課題を決めて行う（思考力・判断力・表現力）」・・・が考えられます。いずれにしても「何ができるようにするか（資質・能力）」を中心に検証を行うことが重要です。